

授業改善のアイデア集 —初等中等教育の学びを生かした初年次から専門教育へ—

【企画者】 たなかよしこ(日本工業大学)
【司会者】 たなかよしこ(日本工業大学)
【話題提供者】 馬場真知子(東京農工大学)
小山義徳(千葉大学)
河住有希子(日本工業大学)
國弘保明(開智国際大学)

1. はじめに

主体的学びということが大学教育に求められて久しい。高等教育機関に自ら学びたいものが集う時代から、ユニバーサルアクセス型の開かれた教育機関としての高等教育が捉えなおされたのは、戦後に端を発する。新制大学が作られたときに同様の悩みが教員によって語られている。参考文献にあげたので参照されたい。そこで松田は、「学生が常に受け身の立場に置かれている」とも述べており、同じく60年代には「女子学生亡国論」という言葉が生み出されたことはその後の大学教育の変化の兆しと捉えられよう。おそらく、今日の多くの教員が、受け身である、と言われた学生のその後の姿であることを踏まえて大学教育における授業そのものを再考したい。

本ラウンドテーブルでは、具体的なアイデアを出し合い、「学ばせる」のではない主体的な学びに対する教員の理解を確認する。

具体的なアイデアとしては、ミニッツペーパーなどがあげられる。ミニッツペーパーとは、毎回の授業のときに配って、学生に授業のポイントや疑問点、理解度、評価などを記入させるものである。教員はこれらを読んで次の授業に反映するのであるが、フォーマットが整えられていて、選択肢として「話し方はわかりやすいか」「板書はわかりやす

いか」「パワーポイントはわかりやすいか」「内容に興味を持てたか」といった項目が挙げられているものもある。

さて、ここで自らに問いかけてみたい。授業者である先生が、興味をもたせ、わかりやすくし、学生の今の状況でわかりやすいものをみせることが果たして、本当の学びにつながるのでしょうか。そして、その学びの姿勢で文科省のいう「生涯学び続ける人材」になりうるのでしょうか。社会で、そのように自分にわかりやすく何かを働きかける人がいない状況を不満に思い、自らの学び方を振り返る以前に、他者を非難する意識につながりはないだろうか。そのような課題も視野にいれつつ、本テーマに沿って議論した。

2. 日本語教育の視点

馬場真知子

外国人留学生に第二言語としての日本語を教える場合、授業では日本語の体系そのものから、応用に至るまでスキルごとに様々な段階を経る。特に中上級者向けのライティングの授業の際には、文体や書き言葉と話し言葉の違いから、機能に着目した表現を明示的に導入することがある。これらの方法は日本人学生向けの日本語の授業についても、日本語を客観的に捉えるという視点から共通点も多い。しかし、外国人学習者の場合は、これら

の言語の部分の習得から全体へと学習させるのに対して、日本語母語話者である日本人学生には、これら文体や書き言葉については、自身の母語使用の全体の中から部分を見つけ出し分析させ、再構築させることが重要である。本発表では日本語を母語とする学生向けに、これらの留学生向けの日本語教育の視点を取り入れた授業例を紹介した。留学生と日本人学生の合同授業のグループ内で、例えば、語彙を調べさせる。これは調べれば回答できる課題であるが、次にそれをグループ内の留学生に日本語で説明するという課題を与える。ある程度日本語のできる留学生ではあるが、ここで学生は説明にとまどう、あるいは伝わらないという経験をする。このことにより、学生は自分の調べたことを説明しなおそうと主体的に再考し始める。つまり説明することにより語彙への理解を深めると同時に、調べた内容を自分なりに再構築するという作業を行うことになる。その作業を経たのち、日本語における専門分野で使う定義や分類などでも使える表現を確認させるものである。

3. 学生の問いに基づいた探究学習のすすめ

小山義徳

昨今、入試制度改革や21世紀型スキルの提言等が行われ、学校教育が転換期に入っている。それに伴い、初年次教育における教員の役割も、知識を伝達する役目の比重が減り、学習者の学びを支援する役割が、今後、増えていくと思われる。そこで、本発表では、授業内容に基づいた問いを学生に立ててもらい、その問いに基づいたレポートを提出してもらうという、「学生の問いに基づいた探究学習の実践」について発表を行った。

まず、学生の質問生成に影響を与えている要因を検討した結果、学生にとって「質問の仕方がわからない」ことや、「自分の中の疑問感を言語化する」ことが負担になっている

ことが明らかになった。そこで、質問生成をサポートするワークシートを用意し、その効果を検討した。また、質問生成自体を成績評価の対象とし、生成した質問に基づくレポートを課した。その結果、学生の学習行動と意識にどのような変化があったのかを報告した。

4. 主体的学びのための「授業」設計＝主体的学びは教えてくれる人がいない授業時間外に可能になる

河住有希子

さまざまな授業改善のアイデアが共有されて久しいが、学びの当事者であるはずの学生の受身の姿勢や自宅学習時間の少なさは、今もなお課題とされている。そこで、学生一人一人が当事者意識を持つための試みとして、eラーニングによる学習習慣形成および学習方法模索のためのプログラムを設計した。

eラーニングコンテンツは、学生の意識が「学習方法」に向けられるよう、中等教育までの学習内容をベースとしている。既習事項に対して「暗記」では答えられない問いが投げかけられることで、学生は既有知識を多角的に問い直し、資料等を参照しながら考え、確かな知識としていく。また、自分一人で解決できない問題は、教室で教員やほかの学生と議論をすることができる。このeラーニングは、教室活動と平行して行われるため、学生は、自学習、グループ学習、講義など様々な形態を体験しながら、自分の学習スタイルを模索していくことが可能になるのである。

ラウンドテーブルでは、このような授業実践において想定される学生の反応と、その反応への教員の対応について、参加者各々の実践例に基づき意見交換した。

5. 授業を受ける側の視点に立ち返り考える

國弘保明

これまで授業改善に関しては、教員がいかに関わりやすく学生に教えるかという論点で

議論が進められてきた。このうえで「学生の学びに主体性を持たせる」ためには、これまでの蓄積をもとに、さらに一步踏み込んだ議論が必要である。

発表者はこれまで教員(=授業者)として、主に日本語教育や初年次教育の分野で大学教育に携わってきた。本年度は縁あって、教員から一步引いた「授業補助者」の立場で授業に参加する機会を得た。時に教員の補助をし、時に学生と席を同じくして共に頭を悩ませた。この「授業補助者」という、教員でも学生でもない立場に身を置いてこそその知見を得た。教員が明示的に教えていても、学生は聞き流している姿はまま見られた。ところが、教員が一步引き、学生を放任するようなストラテジーをとるに至って、かえって学生が学習を進める姿を目にしてきた。春学期という短い期間であっても、学生は大きく変容した。とまどいながらも学習活動を通じて、周囲と調整することを経験し、自らの学習スタイルについて模索を続けた。これは「授業補助者」の立場にあった私も同様であった。

本発表では教員の経験をもとに、授業補助者としての観察から議論を提起した。

6. アクティブラーニングの授業者育成

たなかよしこ

協力者 栗山靖弘

三浦芳恵

講義型からアクティブラーニングへと大きな方向転換を迫られた大学教育において、アクティブラーニングを、学生が主体となって能動的に学ぶと再定義して本稿を進める。

大学教員にとって「アクティブラーニング型は手間がかかる。果たしてそれに見合う効果はあるのか?」「授業準備に時間がかかりすぎて、研究ができなくなっては困る」(京都産業大学 教育支援研究開発センター & 雄飛館ラーニングコモンズ主催) 第一回セ

ミナー、なぜこのような状況になるのかを、本稿では、大学教員になろうとしている人材を通してその理解に取り組む。

「教育」ということが喚起するものとして、「教える」ということが際立つ。教えるということについて、すでに教員であるもの、教員になろうとするもの、いずれの視点からも「大学で教える」ことに対して次のような回答が得られた。

- ・専門分野の自らの知見を順序良く話す／自分の研究分野で得られた新たな事実を話す「大学で教える」工夫としては、
 - ・パワーポイントの並べ方やその図表などを工夫する／双方向にやりとりするために学生に意見を求める／ミニッツペーパーなど授業の最後に感想などを書かせる。
- などがあげられる。

本稿では、これらで述べられたことから、教えることと、知識を授けることの差について言及し、学生が主体的に学ぶということについて考えたい。

一方、授業やミニッツペーパーなどで出された課題がある場合に、果たして受け手は何をどう考えて回答しているのだろうか。本稿では、教育学に関わる大学院在学中の学生がアクティブラーニングの授業補助に入り、2か月過ぎた時点での、課題に回答した事例を以下に示す。

===課題===

以下のことについて、あなたの考えるところを書いてください。

- ・「授業」と「講義」
- ・「教員」と「学生」と「生徒」

回答1 栗山靖弘

- ・「授業」と「講義」

「授業」は既に解の定まった内容を伝達する場であり、初等中等教育機関で行われる。一方、「講義」は多様な解釈や理論等を講じるものであり、高等教育機関で行われる。「授業」は既に定説とされている内容の伝達が中

心であるため、教えられた内容とその理解が重視される。「講義」は学説や理論の紹介が大きな比重を占める。また、学説や理論は論者によって批判や反証の可能性に開かれているため、紹介された学説や理論が妥当なものか否かの検証を含めた批判的思考の要請が重視される。

・「教員」と「学生」と「生徒」

「教員」と「学生」/「生徒」という区切りを設けた場合、「教える」―「学ぶ」関係であることに変わりはない。しかし、「学生」は高等教育機関、特に大学生以上に対する呼称であるのに対し、「生徒」は中学生と高校生に対して用いられる。私見では、「学生」は「学ぶことを生業とする」という意味と考えるため、学問への主体的取り組みが求められる。一方で「生徒」は各学問分野への基礎的な内容を習得する段階にあり、先の「宿題」同様、受動的な側面が強いと考える。

回答2 三浦芳恵

・「授業」と「講義」

教えるか説明されるかの違いです。教えられる内容に答えがあるか、説明された者が学ぶに値する価値があるか判断するかの違いです。

・「教員」と「学生」と「生徒」

教員は学校、特に大学で教授する者です。学生は一般的に大学生、生徒は中高生です。

これらの回答は、協力者によるものであり、その回答自体には問題がない。しかし、ここで問題としたいのは、この答えを書くまでの思考のプロセスを示しはしていないことである。そのことは、若手教員が「答がない問題に最善解を導く」ことに取り組むことを求められる大学での初年次教育を担うには大きな課題となる。なぜなら、今日の大学生の多く

は、正答を覚えるというビリーフが強く、自ら考え、試行錯誤した経験も少ない。これからの時代が予測困難だとされる社会であるからこそ、その一歩先が教員側にも求められているということを討論の上、確認した。

7. おわりに

最後に、主体的に学ぶとは、学ぶということについては自明のことである。誰がどんな教え方をしようが、いや誰も教えなくても、学ぶことは可能であり、それが学びである。大人の意図した枠組みの中で、効率よく何かを知ることは、学びではなく、「教えてもらう」というしかない。生涯学び続ける人材として高等教育機関がなしえることを改めて認識して、大学教育に取り組んでいきたい。

当日は思いのほか多くの先生方にご参加いただき、ご意見、示唆をいただき、若手教員にも、非常に有意義な時間になったことを感謝したい。

【参考文献】

松田正義(1966)「大学生の国語国文学の教養の現状〈シンポジウム大学生の国語国文学の教養の現状〉」国語教育研究11号、広島大学教育学部光葉会

喜多村和之(1988)『大学教育とは何か』、玉川大学出版部

「女子学生亡国論」<http://showa.mainichi.jp/news/1962/03/post-19dc.html>, 昭和毎日(2015.6.15 閲覧)

【謝辞】

本ラウンドテーブルに関わる研究は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))研究課題名「学生の自己評価に基づいた個票による継続的自己教育力育成支援システムの開発と評価」課題番号25330414の助成を受けたものです。